

へんろ道文化と四国

「四国へんろ道文化」世界遺産化の会

青木 光利



1.はじめに

私たちの暮らしている四国には、自らの足で歩いて巡る道の文化と空間が連綿と受け継がれている。千二百年も前から弘法大師とその教えに導かれた人々によって開かれた、八十八ヶ寺のへんろ道文化がそれである。

数年前から、まちづくり研究や運動をともにする友人の提唱により、このへんろ道文化の学習や検証および地域づくり運動の末尾に参加している。市民運動として、四国およびへんろ道文化に脈打つ多元的英知や文物資源、豊饒さと厳しさを合わせ持つ自然や地域風土を足元から見つめ直すことから始めて、自らの住むまちやむらをここに暮らしたい、ここを墳墓の地としたいと思うような地域社会に磨いてゆきたい、と語り合ったのが始まりである。以後、県内各地で体験小集を開いたり、フィールドに出向いて直接的な学習や交流による普及活動を積み重ねている。そして昨年、紆余曲折を辿りながらも、県内外218名の賛同会員を得て、「四国へんろ道文化」世界遺産化の会という任意の市民組織を立ち上げたばかりである。

県内外に在って、それぞれの地域社会で公務や民間の生業を営みつつ、私益を求めない活動に参加、支援しようという柔らかなネットワーク集団ゆえ、順風満帆の船出とはいかず、確固とした組織体や統率された運動力の準備体制が整って立ち上がったわけではない。

「四国へんろ道文化」という無形文化の世界遺産化という唐突的かつ遠大な究極的目標のもとで、具体的には、地域社会やフィールドに立脚した地道で、息の長い迂遠的運動を展開しようという小さくとも自前の意志に基づく志縁集団である。小さな蟻集団であっても、四国各地にこうした市民運動が立ち上がり、その円環的連鎖による楽土づくり運動の小さな旗振り役になれば幸いと思うのみである。

2.四国へんろ道文化の再発見

ここ数年、この四国八十八ヶ所巡礼やそれを支える四国の文化がある種の社会現象のように喧伝されたり、事実様々なメディアを賑わし、全国的関心を集めている。

一昨年从去年にかけてはNHKの全国的ネットワークで四国八十八ヶ所巡礼の連続番組が放映され、多くの視聴者を引き付けたようである。マスコミ等活字メディアにおいても同種の体験特集や連載記事が目立っている。

最近では、高名なエッセイストによる体験紀行本がベストセラーとなって、全国に四国とへんろ道文化への関心を高めている。

この動向は、四国内にあって同様である。四県の経済界やマスコミおよび行政当局のそれぞれでも、四国の一本化や連携振興策の柱の一つとして研究や提言および具体化の検討作業が行われているよう

である。

四国で培われた内発的文化的の再発見が内外の社会的関心を高め、現代社会における四国の役割やアイデンティティを明確化し、所人^{ところびと}には住んでよい、異人^{まれびと}にとっては行ってみたい四国の魅力づくりを生かされるのであれば喜ばしいことである。そして、そのために四国各地に住む地域住民や市民を主体としつつ、全国的英知や各界の運動エネルギーを結集することができれば、近年のへんろ道文化に対する社会的、時代的潮流は、四国を二十一世紀型の品格ある楽土に導く底力となる。

しかし、一方で四国の経済指数や所得指数あるいはインフラ整備率等々、その全国的平均を下回る評価を指摘し、二十世紀型経済開発競争時代と同次元の価値観に基づく四国振興論もある。近年の四国三架橋やXハイウェイなどの高速交通基盤の開通ブームに乗った上滑りの観光産業振興や四国の一体化論を急ぐあまりに、この四国へんろ道文化を拙速的に取り上げるべきではない。

私たち約420万人の四県民が国土の約5%の島で豊かな自然や地域文化とともに生きてゆける固有のローカルクオリティづくりのなかでへんろ道文化再生の意義を考えたい。

あらためて言うまでもなく、時代は変化し、陸海空の交通体系の整備によって、四国へ訪れる観光客やビジネスその他の交流人口も急速に伸びているようである。

八十八ヶ所巡礼も大多数が歩きへんろからバスやマイカーによる車巡礼に変化し、巡礼形式も個人から団体化による観光旅行形式に変質しつつある。そうした現代の巡礼システムでは、迎える側の主人(所人^{ところびと})と訪れる側の客人(異人^{まれびと})との結びつきの希薄化、あるいは自然や歴史など地域文化への共生意識の弱体化の問題等、双方のコミュニケーションの疎遠化が目立ち始めている。加えて急速な大量流動によるへんろ道沿線や霊場界隈での環境悪化という負の側面も垣間見え始めている。また四国に特化されているかのようにお接待<や>善根宿<文化の明る

い一面の心の優しさをことさら強調したり、地域実態と異なる一方的観光情報等、多元的意義と深く重い人間的、社会的史実を内包するへんろ道文化そのものを狭い認識と誤った先入観の枠に閉じ込めかねない危惧もある。さらに三橋時代になって交通や経済流動が半島化したとはいえ、四国が限られた環境容量の島であることにはいささかの変わりはない。大量生産や消費の二十世紀型量的文明志向の開発地にはなじみ難い。

新世紀初頭の今こそ、海に開かれ、つましくとも自立的に生きてきた生活文化の知恵や古い歴史と豊かな自然の存在、そして、二十世紀に失われたこの国の面影を残す四国の文物資源を大切な四国の資産として保全し、生かしてゆきたい。四国各地に住む地元の人々(所人^{ところびと})がまずそれぞれの責任によって治めるフィールドに出て、お互いの営みや心のひだを、多彩な歴史や自然の森羅万象の命を学び、そのなかから新生四国の光を再発見してゆきたい。その大きな光の円環の輪づくりがへんろ道文化の再発見の意義といえよう。

3. 四国の地域特性の概観

■ 島としての地理特性

先に、三橋が架かろうとも四国はひとつの島であることに変わりはない事実を指摘した。

元来、島で生きてゆく叡知として、海や山、川や里の自然空間との共生や暮らしを支える相互扶助システムあるいは市場原理に頼りきりにならない自給的生産・生活システム等、内発的な営力を総合した地域力が育まれていた。平地の町や村、山また山の四国中央山系の高地集落および岬の浦々の漁村集落等の存在と営みを見るまでもなく、限られた島のなかで可能な限りの多角的な地域社会を育ててきているのである。

思えば1970～'80年代の約十年間程、日本列島各地の地域計画や調査に参画した経験がある。この列島各地のフィールドに直接出向いて調査研究や計画立案の作業を行うことを通して、それまで極東の

小さな島国と思っていたこの国の文物風土の多様さ、自然の多彩な姿とその恵みの豊饒さに驚きと感動を覚えることが多かった。予備学習情報や狭い先入知識などいつも吹き飛んでしまった。

日本列島の南北の緯度差は、南は沖縄諸島から北は北海道沖の択捉諸島まで約25度差にも及んでいる。その間約2,800kmに連なって分布する多島群列島だったのである。自然的にも亜熱帯から冷寒帯にわたって、気候や植生も大きく異なる。当然、各地の地場産業や生活文化、住民気質や個性も変化に富んでいる。

トンネルを潜り抜けたり、峠道を越える度に村の家並みや町の佇まいが異なる。臨海部には潮の匂いや雰囲気異なる漁港や港町が連なる。加えて、列島を囲んで南方から黒潮海流や対馬海流が北上する。北方からは千島海流やオホーツク海流が南下する。列島を包む天地山海の複雑多岐な自然条件や極東圏の地理条件が、この国の多様な風土的個性を育む土壌であったのである。日本列島は平板な極東の小国などでなく、変化に富んだ自然と多彩な地域文

化が織りなす風土大国であった。

四国もまた、緯度差を別にすればこの国の縮図とあって良い程の多様な風貌を見せる地理特性を有している。

穏やかな瀬戸内海を前にし、石鎚山系や四国中央山系を馬の背にして西瀬戸圏に連なる愛媛、雨量少なく、なだらかな阿讃山系と山麓平坦地を有し、中国地方と向い合う香川、四国一の大河・吉野川を有し、紀伊水道に面して近畿都市文化に繋がる徳島、そして山また山に扇形に囲まれ、黒潮踊る太平洋を前に独自の道を歩む高知と、それぞれの地理特性が異なっている。当然、そこから生まれる地域文化や県民気質、自然風景も多様である。一方、この四県合わせた四国の面積は約18,800km²、人口約420万人である。そのなかに約1,200kmのへんろ道が円環しているのである。その地理的多様性と島としてのコンパクト性が誰でも、どこからでも巡ることの出来るへんろ国のイメージを全国に発信し、「お四国」という民衆の聖地を仕立て上げる素地となっていると思うのである。



四国八十八ヶ所巡礼地図

■ 多様な天地山海の自然と流域世界

先項に日本列島の多元的地理特性と多様な自然を指摘したが、四国もまた然りである。

毎年のように日本一といわれる多雨を伴う台風が常襲する太平洋側ゾーン(高知および愛媛、徳島南部の一部)、緑深き山々が東西に縦貫して連なる内陸中央山岳ゾーン(徳島、高知および愛媛)そして北部は穏やかで温暖少雨の瀬戸内海の気象と多島海自然に面する瀬戸内海沿岸ゾーン(愛媛、香川および徳島の一部)という南北に三区分できる自然風貌を見せるのである。

そして、この四国内陸部を縦貫する中央山系には、その稜線に平行して南北に三本の地質構造線(仏像構造線、御荷鉾構造線、中央構造線)が東西に走っている。脆弱な地質もあって急峻な地形を形成し、奥深く、複雑多岐な山ひだを象って、中央山岳部から東西南北の海に開く流域をそれぞれに固有な自然のマイクロコスモスに仕立て上げている。

例えば、中央山地から発する吉野川流域、剣山山地からの那賀川流域。一方その反対側にあって雨量の多い物部川流域や仁淀川流域、高知県西部の四万十川流域。同じく中央山地や石鎚山地から北上する肱川流域や重信川流域、加茂川流域そして日本一雨量の少ない香川県の阿讃山地とその山麓溜池群というように、四国それぞれの自然循環系に適った天地山海の流域が形成されている。加えて、四周は海に開かれ、変化に富んだ多島海と入り江や半島世界の美しい海辺風景が連続している。

一つひとつは、日本を代表するような大山岳、大河川、大平野などではないが、多様多彩できめ細かな自然条件で織りなす流域世界の自然生態系の妙は四国の大きな財産である。

さらにこの変化に富む自然条件が、人智を超えるような自然造形を様々な場所に象り、四国全体を天地山海の曼陀羅境地に仕立て上げ、神や仏に畏れながら、神や仏と戯れることのできる聖地に誘うイメージ基盤を形成している。

■ 多極的人文と歴史の島

この変化に富んだ自然条件に呼応し、そこを生活と生産、文化や交流の舞台としてきた四国的人文や地域社会もまた多面的である。

古来より「身一つにして面四つあり」と古事記の国生み神話に伝えられるように、阿波・土佐・伊予・讃岐とそれぞれに異質な人文と歴史を有している。言わば生まれながらに四つの人格と顔で成り立っている島国である。

作家の司馬遼太郎氏は、その著書「風塵抄(中央公論社刊)」のなかで『四国は人口約四百二十万、面積約一万八千八百平方キロメートル、この人文の宝庫の島が私には常になつかしい』という一文を残してくれている。

事実、氏は「菜の花の沖」、「竜馬がゆく」、「坂の上の雲」そして「空海の風景」と四国四県を舞台にした国民的小説を残してくれた。それぞれの主人公を育んだ土地柄、周辺人物群の個性とお国気質そしてその背景となる四県の地域文化性を表現して絶妙である。

数年前、四国四県の文化的所産である建築文化について、一度は学会活動でその主なるものを集録するために、もう一度は専門組織の協会活動で四国の誇るべき建築88ヶ所を顕彰し、そのガイドブックを作るため、四国各地の建築を見聞する機会に恵まれた。

吉野川流域に拮がる藍作地帯と農家建築群、それを商った池田町や脇町の豪商町並み、そして古来より社寺建築の発達した徳島県、「分け入っても分け入っても青い山」という山頭火の句を思い出すような深い山々に囲まれる一方で前面は太平洋の大海原という地理条件下のもと、陸海ともに中央文化から遠く隔絶されたなかで、風と雨に戦いながら独特の地場素材と技による土佐民家群の建築様式を生み出した高知県、四国唯一の近世伊予八藩体制や東、中、南予という複雑な地理構造のなかで、多彩な海、山、町の集落建築や町並み建築群を生み出す一方、内海沿岸や島々における歴史的海道建築を発展させた愛媛県、そして古代より常に中央文化をいち早く

受容し、時代の文化を先取りして華麗な建築文化を
発展させた香川県という風に四県四様の自然や歴史の
地域風土を反映させている。

さらに四周の沿岸部では、古くからの黒潮圏漁撈
文化、瀬戸内の文化や物流の大動脈=海道文化が
蓄積されている。一方、中央山中には四つの国を結
ぶ政官道や文物往還道、木地師や平家伝説の歴史
道、本四国巡礼道に繋がる脇街道や四国各地の「地
四国」巡礼道等々、様々な山間往環道網が張り巡ら
されている。

この一千年以上に亘って積み重ねられてきた四国
の内発的歴史文化の所産にきめ細かい再評価の視
点を当て、誇るべき資産としたい。

およそグローバルな人類の英知は、地域固有の自
然や歴史および文化を大切にす視点とそれを学び、
未来に成熟させる姿勢のなかに宿るものと考え
る。四国各地の流域文化や地域再発見運動に自治体、
市民ともに力あわせたいものである。

4. 四国へんろ道文化と地域づくり

前章で、四国の地理や自然および人文について、
一市民の小体験と狭い視点を通して概観してみた。
事実、ここ数年へんろ道文化についての小集会や交
流会に参加するたびに、地元参加者やへんろへ
のお接待(善根宿提供も含めて)体験者から心の琴線
に触れる話を聞いたり、へんろ道沿線の地域の歴史
遺産や自然空間に心を震わされることが多かった。

県内でも、40年程前までは、歩きへんろへのお接
待や善根宿の提供がそこかしこの町や村で行われ
ていたという。そのなかには重い病や故郷に帰り難
い業を背負った人との出会い、生活困窮による盗難
被害の体験、さらには、当時のムラ社会風土のなかで、
歩きへんろという異人への好意の一方で賤視の目射
しや忌避意識も併存していたことなど、自省を込めて
切実に吐露してくれた古老にも出会えた。現代の明
るい一面だけでなく、こうした史実も正しく学び、受け
止めて、これからの地域社会づくりの糧とすべきであ
ろうことを学んだ。また歩きへんろに徹し、例年に渡っ

てその意義の普及活動や道しるべの標示活動、古
いへんろ道の修復や草刈り奉仕活動等を行う一方で、
地道な体験に基づく詳細なへんろ道ガイドブックを刊
行している民間人の保存団体の存在も知ることがで
きた。

こうしたフィールド体験や学習、シンポジウムや各地
の有識者の助言等を通し、へんろ道文化の受け継ぐ
べき叡知や変革せねばならない忌避意識等、これか
らの四国の地域づくりに生かす上で議論すべき四つ
の視点=キーワードを発見的に導き出してきたのである。

それが、①「癒し」、②「ボランティア」、③「文化交
流」、④「環境保全」という地域づくりの四つの基本
視点である。

まだまだわずかな見聞と学習経験しか持ち合わせ
ず、足らざることのみ多しであるが、それを埋めてい
ただく助言と支援者や協力団体の出現を期待して、
敢えて小論の一石を投じてみたい。

①「癒し」の視点

近年、「癒し」という言葉が、あちこちで多用され、
本来の意味や感覚が麻痺しそうである。二十世紀
末からの、この国の経済的低迷や社会的閉塞現象、
都市と農村双方における過密と過疎の不満と不安等、
国民一般の心の拠り所や人間同士の社会的絆の喪
失感という病理現象が背景に垣間見える。

最近の歩きへんろの増加、とりわけ生まれながらに
豊かさを享受してきた青年層や現代の社会システム
を構築してきた企業戦士体験の熟年層の増加は、極
めて今日的現象である。

経済的豊かさや利便の快適追求の果てに見失っ
た心の栄養素や自己の存在意義を問う自分探しの人々、
自他の関係づくりに苦しむ人々、現代的閉塞感や疎
外感から開放されたい人々、もう一度自らの内なる力
や可能性を引き出して人生をやり直したいと願う人々
など、それぞれの理由あつての歩きへんろである。

作家の早坂暁氏は、これらの歩きへんろを「哲学的
へんろ」と総称し、千二百年の四国へんろ道文化
史に一頁を加える変化であると講演された。確かに

この「哲学的へんろ」の実数はまだまだ少ない。しかし、この人々による自然との全身浴的接触や四国の人々との出会いと交流、そして多彩な文化との触れ合いによる癒し体験が、今日のへんろ道文化の情報発信力をリードし、四国を魅力的な癒しの国に映し出している。

人生の重荷から救われるとは、心の内側から癒されるとは、あるいは生かされるとは、という時代を越えて人間が問い続ける旅が巡礼であるとすれば、それを受け止めるに足る美しい天地山海の聖地イメージの持続と、客人を心優しく迎えることのできる懐深い主人が住み続けられる楽土づくりこそ、選ばれたへんろ国・四国の古くて新しい地域づくりの主題である。自由と責任ある自治のまち、むらの連帯の輪を各地に繋ぎ、人に優しい癒しの国づくりネットワークを官民連携してめざしたいものである。

②「ボランティア」の視点

一方で、二十世紀型の経済社会体制の限界や矛盾が露呈してきた今日、地域社会においても、従来の行政や企業のみならずに依存しない自立的市民社会づくりの気運がうまれつつある。

あの阪神淡路大震災(1995年)や日本海重油流出事故(1997年)に際しての、全国からのボランティアやNPO等の行動力は、市民の公益活動がこれからの地域社会を支える必須の力であることを示した。

四国ではこの現代的潮流よりはるか前から「お接待」という無償の奉仕文化を育んでいる。もちろん今日のボランティア概念とかつてのムラ社会規範の奉仕概念を同一視するものでないし、同義と考えるものでもない。迎える側として、へんろへの同情心や大師信仰への帰依心あるいは自分や家族への身代り参り等、様々なお接待動機もあったことだろう。

しかし、そこに他者へのいたわりや他益のために行動する意思があり、それを受け止めて互いに一期一会を重ね合わせることが確認されていたからこそ、双方の再生の力となり得たのでなからうか。へんろ者のみに表面に現われる旧来の一方的善意の施し

のあり方も再考すべきであるが、この双方の心の重ね合いや覚醒にお接待の深い知恵を学びたい。

地域コミュニティの核として機能しつつ、へんろや一般旅人へのお接待に開放されていた寺々の通夜堂や集落の茶堂群文化、里道やへんろ道の維持・管理に努める各地の草刈り奉仕活動の伝統、そして各地の「島四国」や「地四国」文化等、内発的ボランティア文化が蓄積されている。

こうした伝統をもとに、迎える側、訪れる側双方の対一の知恵の交換・交流ネットワークを築いたり、四国の地域間環境保全ボランティア(美化、教育、研究など)や行政区分を越えた住民福祉の連携によるボランティアネットワークに発展させることは、二十一世紀四国の自立性を高め、住みたい四国、行ってみたい四国の足腰強化の基盤となるであろう。

③「文化交流」の視点

『遍路道は例えようもないくらい、たくさんのものを私に与えてくれた。ただただ与えられつづけた旅だった』(朝日新聞2001年5月23日付より)。

昨年从今年にかけて、「平成娘巡礼記」を50回にわたって連載した警女三味線演奏家の月岡祐紀子さんの最終記の言葉である。三味線を弾き、警女唄を奉納演奏しながら八十八ヶ所を巡るという実体験から綴られた文章は、そのへんろ途上で出会った人々との多彩な交流や苦楽をくり返す厳しくも豊かな自然空間との遭遇体験等、歩きへんろでの様々な経験が、いかに人間の内面をゆり動かし、心豊かにさせるかを、筆者の率直な筆の冴えもあって私たちにストレートに届いた。四国の人々もまた感動を与えられつづけたのである。

この身近な例に違わず、人と人の出会いのあるところ、互いの共感や反目があり、異文化への覚醒や衝突もある。しかし、やがて心を通わせあえば、互いの差異を認め合い、力を合わせるようになって、地域文化や暮らしの有り様にも磨きがかかる。そして新しい地域文化に成熟し、魅力ある地域社会が育まれてくる。異文化との遭遇が地域を活性化させることは

歴史の教えでもある。私たちの体験や学習のなかでも、食文化や農林栽培技術、焼物や土木技術など、歴史的にもへんろ道文化のなかで持たされたと言われる民間話が多くあった。迎える側の主人と訪れる側の客人の出会いと相互の物心の交わり合いから生まれた無名の人たちによる有形無形の文化交流の結晶であった。

二十一世紀は文化交流の時代でもある。多様な地域づくり交流や研究開発交流、文芸や芸術交流、さらには四国らしい草の根お接待交流をグローバルに発展させたい。

一周遅れのトップランナーとして価値ある地域文化を、私たち定住者サイドだけでなく、四国を訪れる客人等の非定住者との交流のなかで、さらに誇れる文化に磨き上げたい。

④「環境保全」の視点

豊かさと厳しさを合わせもつ自然が四国の特性であり、大きな資源であることに異論を挟む余地はない。私たちの少ない体験でも様々な彩りを見せる豊かな自然空間に出会うことが多かった。多島海の瀬戸内の海、里の裏山の広葉雑木林、山にさしかかると杉木立の植林地、さらに奥山では太古の原生植生を今に伝える自然林がある。川に差しかかると、小さな歩み板橋のある小川、屋根付橋の架かる里の川、沈下橋の渡る大河等々、へんろ道沿線には四国の自然生態系がパノラマ廻廊のように連なって人々を包んでいる。この町から里、山、川、海へと連なる自然空間の維持と保全システムのあり方がまず四国に問われている課題である。

今もなお、草刈り奉仕や道普請など地元民の手でへんろ道が維持されたり、里山が荒れるにまかせていたところを竹炭づくりで里山を再生させ、一方でその益による広葉樹の植林で奥山の森づくりに努める人々のグループにも出会った。

四国各地にも、河川改修やダム開発あるいは大規模林道等の公共型開発事業、過疎による段畑や棚田の耕作放棄地、山林の施業不足の荒廃等、一歩

内側に潜ってみると様々な議論と環境保全策が急務とされているところが多々ある。

四国へんろ道の円環が、その自然環境保全のための研究や学習のネットワーク化の道となり、自然空間評価のインジケーターの役割を果たすことにつながれば、青き国・四国のイメージは恒続的にその輝きを発し続けるであろう。

『自然にふれるという終わりのないよろこびは、けっして科学者だけのものではありません。大地と海と空、そして、そこに住む驚きに満ちた生命の輝きのもとに身をおくすべての人が手に入れるものなのです』。アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソン女史の最後の著書「センス・オブ・ワンダー（新潮社刊）」に書き記された一文である。女史の絶唱ともいえる教えに深く学びたい。そして天地山海の自然に抱かれる四国の姿を未来に伝えたい。

5. 終わりに

二十世紀における島国・四国は、幸か不幸か荒々しいまでの国土開発や経済流動の主軸から一歩離れた距離に在ったことにより、大都市部で失った自然や歴史資産、伝統的地域文化等、二十一世紀の成熟社会に応えるに足る品格ある面影の町や村、落ち着きのある生活文化や伝統資源をまだまだ多く残している。

その大きな文化資産のひとつが、へんろ道文化という失われつつある徒歩による道文化である。新幹線鉄道や高速自動車道が走り、空をジェット機が飛び交う現代であるが、その利便の快適を追求しているうちに、人間もいつしか移動の「モノ」としてパッケージ化されてしまった。二十一世紀はこうした手段に併存して、もう一度、人と人、人と自然や歴史空間が直接全身的感觉でコミュニケーションできるゆったりとした道文化の魅力を取り戻すことが急務である。そして文明のスピードと文化のゆとり、豊かな人間の心と身体のバランスによる本性的健康を再生させる場所提供の役割こそ、四国の持ち味である。

『寺には瞑想の場がある。人びとの願いや供養の

ところ、あるいは慈悲にすぎるところが本堂の内外に満ちているのを感じることもある。しかしお遍路の本当の宝物は路上にあるという思いが、歩くにつれてさらに深まっていった。路上には発見がある』。へんろ道を歩き通されたエッセイスト辰濃和男氏が、「四国遍路(岩波書店)」に記された一節である。歩行文化再生の意義ここに有り、といえる。

最後に、四国八十八ヶ所という円環的連携システムの叡知を現代の地域づくりに映し替えたい。

二十一世紀の地域づくりは、これまでのように、国や地方行政および企業セクターだけに依存できない。地域を担い、地域を治める主体は私たち地域住民である。自らの自由と責任による地域づくりや自治活動に参画することが個性ある地域力を高め、成長させる。

生命あるものを慈しみ、共に喜びや悲しみを分かち合い、支え合って生きるという見本が、足元の四国へんろ道文化のなかに脈々と受け継がれている。私たちは、今一度この歴史的に培われた共生の精神風土の魅力を内外に語り掛け、四国へんろ道文化の意義を拓きたい。

そして、その運動の連帯の輪が、美しい結晶リングに繋がって、へんろ国・四国の存在と魅力を拡く発信するようになり、究極的には、四国へんろ道文化という無形文化の価値を世界遺産に認められるようにしたいと願っているのである。

Profile 青木 光利

1944年愛媛県生まれ。

法政大学工学部(建築工学科)卒。

(株)林魏建築設計事務所取締役松山設計室長。

日本建築学会正会員、日本建築家協会正会員、(財)えひめ地域政策研究センター評議員、今治明德短期大学非常勤講師、えひめ地域づくり研究会議代表運営委員、「四国へんろ道文化」世界遺産化の会代表世話人。
